沼高図書だより

令和４年11月11日
広島市立沼田高等学校
図書委員会

図書室に新コーナー

11月から季節をテーマに

すっかり秋景色になり、肌寒さも感じるようになった。図書室では「読書の秋」ということで11月から新しく季節のコーナーを開設している。

コーナーは図書室入り口に設けられ、季節ごとにテーマに沿った図書室の本が集められる。今回は「冬」をテーマとして『フォルトゥナの瞳』『ゲド戦記』『ハリーポッター』シリーズなど、さまざまな本が集まった。図書委員が作成したテーマに沿った装飾もなされている。今回のテーマは12月下旬まで設置される予定。

おすすめの本や新コーナーのテーマに対する提案など、図書に関する意見を随時募集している。提出はアンケートボックスまで。

新設された「季節の本」コーナー

本棚の宝物

このコーナーでは、先生方にとって思い入れのある一冊を紹介していただきます。今回は国語科の松本誠司先生にお話を伺いました。

―先生のお気に入りの一冊は何ですか。

アントニオ・タブッキの「インド夜想曲」です。主人公が、失踪した友人を探してインド各地を旅する小説です。

―なぜその本を読もうと思ったのですか。

高校生の頃から、海外の翻訳文学をよく読んでいました。

―この本の魅力を一言。

これはイタリア文学なのですが、幻想文学として見ることができるし、美しく面白い本です。この本を読むと、本当に文学は冒険だなと思いますよ。

―なぜ、この本を選んだのですか。

その表現の仕方が本当にすごくて、まるで映像のように頭に流れてきました。

―印象に残っている場面は。

これもその一冊です。

とある廃れかけた病院で、音が響いている描写があるのですが、

新刊紹介

一冊目は窪美澄（くぼみすみ）『夜に星を放つ』。かけがえのない人間関係を失って傷ついた者が再び誰かと心を通わすことができるのか―。人間関係の複雑さを読者に問いかける短編集。最初の「真夜中のアボカド」という1編は、コロナ禍における自粛期間中、何気なくアボカドを育てつつ、婚活アプリで交際相手を探す女性の物語で、人と別れることの哀しみが描かれている。

二冊目は『大学学部調べ・芸術学部』。沼田高校は文化部の活動も盛んなため、芸術学部に興味がある人も多いだろう。この本では、芸術学部ではどんなことを学ぶのか・キャンパスの様子・卒業後の就職先などが詳しく書いてある。芸術全般、音楽・デザイン・放送・映像・写真・舞台に興味がある人はもちろん「大学ってどんな感じ?」と思っている人はぜひ。

人の心の揺らぎが輝きを放つ『夜に星を放つ』（右）と、芸術学部（左）

だから私はこの本が好き

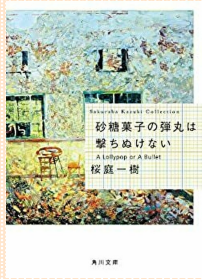
図書委員のブックレビュー

その日、あたしは山を登っていた。見つけたくない「あるもの」を見つけるために。中学生の山田なぎさは、子供という境遇に絶望し、一刻も早く社会に出てお金という「実弾」を手にするため、自衛官を目指していた。そんななぎさに転校生・海野藻屑はなにかと絡んでくる。嘘つきで残酷だが、どこか魅力的な藻屑となぎさは徐々に親しくなっていく。

桜庭一樹（さくらばかずき）

『砂糖菓子の弾丸は撃ちぬけない』。可愛らしいタイトルと表紙は裏腹に、切実な痛みに満ちた青春文学です。

（レビュアー・大木こころ）



ほんのトリビア

皆さんは世界一高価な本を知っていますか?それは、レオナルド・ダ・ヴィンチが書いた「レスター手稿」と呼ばれるノート。全36ページしかありませんが、オークションで約34億円で落札されました。

天才ダ・ヴィンチの手書きのノートで、水理学という学問が主題となっているそうです。ちなみに今の所有者は、マイクロソフト創業者のビル・ゲイツ。

読書百遍

読書の季節といえば「秋」を思いつく人も多いだろう。私自身、小中学生時代には「秋は読書の季節なのでたくさん本を読みましょう」と毎年のように言われてきた。しかしなぜ読書といえば秋なのか、改めて聞かれるとよく分からない▼ネットで調べてみると中国の唐時代の詩人・韓愈（かんゆ）の詩の一節が元になっているそうだ。「秋になって長雨が終わって空も晴れ、涼しさが丘陵にもきている。ようやく夜の灯に親しんで、書物を広げられる」―これを夏目漱石が小説の中に引用したことで、日本中に広まったという。何となく、秋は気候も良く夜も長く、過ごしやすい季節だからかと思っていたが、それは日本も中国も同じであるようだ▼「朝読書の時しか本を読んでいない」「朝読も、頭がぼーっとして内容が入ってこない」という人も多いのではないだろうか。あるいは「マンガなら読む」という人もいるだろうが、絵のない本は感性や想像力が養われるという「ならではの良さ」がある。普段本を読まない人も、この機会に本を読んでみてはどうだろう。読む本がないという人は、新しい本も置いているので図書室に来てみてほしい。（永井詩緒）

編集後記

本に迷う人は、何かの受賞作を読むのも良いですよ。